

社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子どもの育成

～「学習の個性化」の充実を通して～

宇都宮大学共同教育学部附属中学校共同研究

I 研究テーマ設定の趣旨

本附属学校園では、2019年7月より本格的に幼・小・中・特別支援が連携し、「社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子ども」を目指す子ども像と定め研究を進めている。具体的には各教科等の研究部会として、13のプロジェクトを立ち上げ、12年間の子どもの継続的な発達を視野に入れ、学びの道筋を設定して授業実践とその評価を進めている。

プロジェクトによる研究が行われる以前は、各校種がそれぞれに研究テーマを設け独自に研究を重ねてきた。本校では「共同研究」として、「思考を深める授業の創造」や「確かな学びを通じて自己を確立する生徒の育成」など、全教科の柱となる研究テーマを設け、各教科がそれを具体化した論を立て研究を進めてきた。2021年7月からは「社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子どもの育成 ～1人1台端末を用いた実践を通して～」という研究テーマを設定し、本学校園が目指す子ども像と、そのために育成したい3つの力＜学びをつなげる力・かかわり合う力・やり遂げようとする力＞を視野に入れながら、1人1台の端末を用いた実践を通し、その手だての有効性を評価する研究を2年間行ってきた。

2023年7月からの「共同研究」における新たなテーマ設定に向けて、本校の教職員にアンケート調査を行った(図1)。本アンケートは、本校の現状や生徒の姿を鑑みた際に、教職員が追究する必要性を感じている点について調査したものである。アンケート調査の結果を見ると、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」、「主体的な学び」、「自己調整学習」といった回答が多かった。

「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」については、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(以下「令和3年答申」とする。)の中で「これからの学校においては、子供が『個別最適な学び』を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。(中略)さらに、『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通

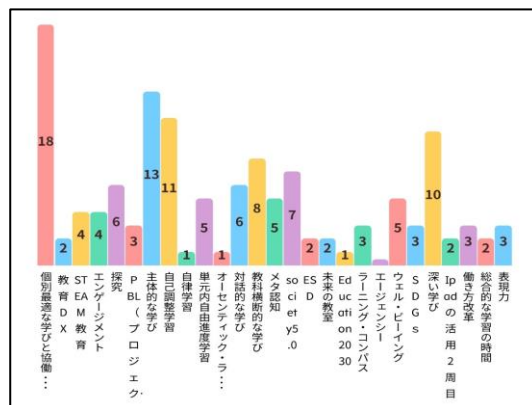


図1 本校教職員へのアンケート結果

じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要である。」とされている。さらに「個別最適な学び」については「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、「指導の個別化」は「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなど」、「学習の個性化」は「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」と記されている。

本校では過去に「コミュニケーションする力」や「協同」に着目した研究を行うなど、「協働的な学び」に関連した研究を行ってきた実績がある。現在も本校では授業中や諸活動の中で、級友や教職員などと積極的にかかわり合い、自らの考えを広げたり深めたりする生徒の姿が多く見られる。一方で、本校教職員が必要を感じている「主体的な学び」や「自己調整学習」など「個別最適な学び」に関連する部分については、近年の研究においてあまり重点を置いてこなかったという課題もある。さらに、本校では生徒自身が「セルフコントロール」できるようになることをモットーとし、様々な活動に取り組んでいる実態がある。

これまでの本校の研究の成果と課題や本校の現状、生徒の実態などを踏まえ、本校共同研究では、「個別最適な学び」の中でも特に「学習の個性化」を充実させることが、より一層の「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」に繋がると考えた。そして「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」を図ることで、本学校園が目指す子ども像の実現や本学校園で育てたい資質・能力のよりよい育成を目指し、本研究テーマを設定し、授業実践及び分析を行うこととした。さらに、授業実践を重ねる中で「『学習の個性化』を促す手だてなどを模索し、その実践事例を発信することを通し研究成果を地域へと還元することも、本研究の大きな意義であると考えている。

Ⅱ 研究の目的

本研究は上記の研究テーマ設定の趣旨にもとづき、次の2点を目的として研究を進める。

- ① 本学校園が目指す子ども像に向かい、「学習の個性化」を充実させた実践を通し、育てたい3つの資質・能力の育成を図る。
- ② 「『学習の個性化』を促す手だて」などを模索し、実践等を地域へ発信する。

Ⅲ 研究の期間

- ・2023年7月から2026年6月までの3年間とする。

Ⅳ 研究計画・研究方法

本研究は以下の研究計画・方法に基づいて研究を進めることとする。（順不同）

1 年次

- （1）アンケートを実施し、生徒の回答結果から育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。
- （2）校内授業研究会を2回開催し、それぞれ2教科、計4教科の授業提案を行う。
- （3）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識を深める。
- （4）各教科で「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を想定し、それらを踏まえた実践を行うことで、検証を進める。
- （5）実践などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

2 年次（本年度）

- （1）アンケートを実施し、生徒の変容から育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。
- （2）校内授業研究会を2回開催し、それぞれ2教科、計4教科の授業提案を行う。
- （3）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識をより深める。
- （4）各教科での実践を通して、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、検証を進める。
- （5）実践などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

3 年次（案）

- （1）アンケートを実施し、生徒の変容から育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。
- （2）校内授業研究会を1回開催し、計2教科の授業提案を行う。
- （3）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識をより深める。
- （4）各教科での実践を通して、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、検証を進める。
- （5）実践などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

V これまでの研究

本研究1年次の取り組みは下記の通りである。なお、その具体や成果などの詳細に関しては、『宇大附属中研究論集 第72集』を参照いただきたい。

(1) 群馬大学共同教育学部附属中学校と合同研修会

群馬大学共同教育学部附属中学校と合同研修会を行い、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」を話題の中心にして、互いの授業実践の共有や授業の在り方についての意見交換などをする機会を教科ごとに設けた。群馬大学共同教育学部附属中学校では、「生徒一人一人の学びを最大限に引き出す授業の創造 ①ICTを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の充実に向けた実践を通して ②教科横断的な学びを実現する『未来創造科』の実践を通して」という研究テーマを掲げ、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」に着目した研究を行っており、合同研修会は本校教職員にとって、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」について理解を深めるよい機会となった。

(2) 「学習の個性化」について見識を深めるための校内研修

8月と10月に「学習の個性化」について見識を深めるための校内研修を行った。研修の内容は表1のとおりである。

表1

8月	①文部科学省や独立行政法人教職員支援機構で作成した動画を視聴する。 ②群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会や①の動画視聴で感じたことや考えたことを踏まえ、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」について、教科をこえて編成した4つのグループで意見交換する。 ③「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」を実現するために、どのような手だてが効果的か、またどのような授業を行ってみたいかについて意見交換する。 ④各グループで表出した考えを全体で共有する。
10月	①8月の研修後に各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、各教科に共通する点や教科の特性が表れている点を中心に、教科をこえて編成した4つのグループで意見交換する。 ②各グループで表出した考えを全体で共有する。

これらの研修は、教科をこえたグループを編成し行った。教科をこえたグループでの意見交換が、「学習の個性化」の充実を図るために有効な手だてや授業の具体、期待する生徒の姿などについて考えを広げたり深めたりすることに有効に働き、その後の授業改善へと繋がった。

(3) 生徒へのアンケートの実施

各教科で本格的に「学習の個性化」を充実するための授業改善に取り組む前に、本学校園で育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況を把握するための一助として、全校生徒へアンケート調査を実施した。3つの資質・能力に関する質問項目は本学校園研究主任会で、「学習の個性化」の充実に関する質問項目は、前述の校内研修で表出した考えをもとに本校共同研全体会でそれぞれ作成した（次頁図2）。

アンケート調査の結果を見ると、多くの質問項目で肯定的回答が90%以上であった。その中で、「私は課題を解決する際に、課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。」（肯定的回答82.2%）、「私は課題を解決する際に、課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。」（肯定的回答86.9%）、「私は課題を解決する際に、課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。」（肯定的回答89.5%）の3つの項目に関して、他の項目と比較すると肯定的回答が少ないことが分かった。この3つの項目に関しては、どれも「自己調整力」に関する項目だという共通点がある。

研究2年次及び3年次にも引き続きアンケート調査を行うことで、生徒の変容から育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取り、「『学習の個性化』を促す手だて」の有効性の検証及び授業改善へと繋げていくこととした。

（4）校内授業研究会

各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を踏まえて、研究1年次は国語科、理科、社会科、音楽科が授業提案を行った。また、指導案や資料などに関しては本校ホームページに掲載し、研究の成果として発信することとした。各教科の授業実践の概要については、本校のホームページを参照いただきたい。

（5）「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」の整理

前述した校内研修での意見交換や今年度の授業実践を踏まえて、各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を整理した。これらに関しては、引き続き授業実践及び検証を重ね、研究を推進していく中で更新していくこととした。

附属学校園で育成したい3つの資質・能力について（4件法）	
	よくしている 時々している あまりしていない していない
私は課題を解決する際に、	
【学びをつなげる力】 ○これまでに身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決している。 ○物事の関係やつながりを整理し、順序立てて考えている。 ○必要に応じて適切に情報を得たり、情報を整理・比較したりしている。 【かわり合う力】 ○他者と交流することで、自分の考えを広げたり深めたりしている。 ○自分の思いや考えを言葉や行動、絵や図などさまざまな手段で表し、他者にわかりやすく伝えている。 ○他者の思いや考えを受け入れて、自分の考えの形成に役立てている。 ○複数人で課題解決に臨むときには、コミュニケーションを図り、協力して課題を解決している。 【やり遂げようとする力】 ○難解な課題であっても、解決しようと試行錯誤している。 ○自ら進んで課題を解決している。 ○課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。 ○課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。 ○課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。	
「学習の個性化」の充実について（4件法）	
そう思う やや思う あまり思わない 思わない 各教科の授業には ★これまでの学習で身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決する授業がある。 ★自分の興味・関心に応じて、自ら学習課題を設定する授業がある。 ★自ら情報を収集、整理・分析し、まとめ・表現する授業がある。 ★課題解決の方法や学習の進め方などについて、自ら調整する授業がある。 ★自らの学習の達成度やそこに向けた学習の進め方などについて振り返り、その後の学習に生かす授業がある。 ★自ら評価基準（A・B・C）を設定し、学習に臨む授業がある。	

図2 生徒への質問項目一覧

VI 本年度の研究

本年度は、前述の計画に沿って研究を進めた。ここでは、その具体や成果などについて述べていくことにする。

(1) 群馬大学共同教育学部附属中学校と合同研修会

本年度も群馬大学共同教育学部附属中学校と、互いの授業実践の共有や授業の在り方についての意見交換をする機会を教科ごとに設けた。今年度は両校の研究内容を鑑みて、「探究」、「学習の個性化」、「AARサイクル」に焦点を当てて情報の交流を図った。下記は合同研修会後の本校教職員の振り返りの一部である。

- ・「探究」させていく上で、どのような課題設定をするかが重要である。特に国語科として「言葉による見方・考え方」に着目した問い立てをさせる必要がある。(問いによっては、「数学的な見方」や「社会的な見方」に寄った探究にもなりかねない。)
- ・「AARサイクル」は生徒に敷いたレールの上を走らせる活動ではないため、「PDCAサイクル」とは異なり、綿密な計画は立てない。「やってみて、その結果に応じて、次の一手を打つ、それを繰り返し、ゴールにたどりつく」というような臨機応変な姿勢で探究をさせる。
- ・問い立ての際には、「SVシート」(スキルボキャブラリーシート)を活用し、これまでに身に付けたスキルや積み上げてきたボキャブラリーを意識し課題設定させる。本校でも「言葉のお道具箱」を使い、既習事項の積み重ねを行っている。その外にも類似している点が多々あった。
- ・「AARサイクル」をうまく回すためには、「振り返り」の部分が重要であり、これまで以上に時間をとる必要がある。(国語科)
- ・ポートフォリオの作成について(学習の個性化)
見通しを持って1単元を1枚にまとめて書いていく方法と、個に応じてまとめ方を工夫させて自分がわかりやすいまとめ方を見つけさせる方法と、同じ単元でもまとめ方を変えるだけで生徒の学習方法に変化が見られると思った。
- ・AARサイクルについて
保健体育はもとより、AARに近い学習形態が多いのではないかと意見がどちらからでもでた。今までの経験を元に実践をして、新しい技能を習得していくことが基本になっているから。(保健体育科)

(2) 校内研修

10月に校内研修として、これまでの研究成果を踏まえ、「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素について教科をこえて意見交換する場を設けた(図3)。本研修では「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素を分類・整理することで、授業改善の観点を明確にすることができたと考える。今後、研究を推進する中でこれらの要素をさらに精査していきたいと考えている。本研修を通して見出した「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素は下記のとおりである。

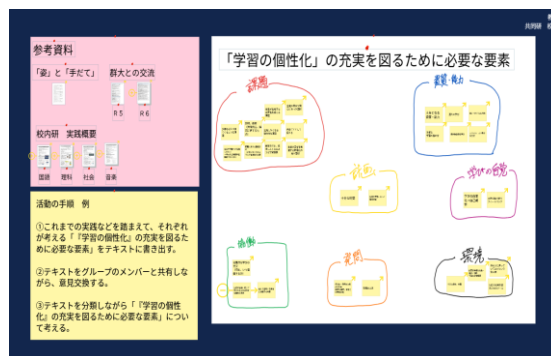


図3 校内研修の様子

- ・課題設定
- ・土台となる資質・能力
- ・指導計画
- ・時間
- ・学びの自覚化
- ・協働
- ・環境
- ・多様性の尊重
- ・目標(ゴール)の設定
- ・教師のサポート

また校内研修の一貫として、同じく 10 月に一般社団法人こたえのない学校代表理事の藤原さと氏を本校に招き、授業観察後、「協働の中の個別化（個性化）、探究における個別の評価」という演題のもとご講話をいただいた。藤原氏は、2014 年に「こたえのない学校」を設立し、30 以上の小学生向けの探究カリキュラムを開発・実施しており、世界屈指のプロジェクト型学習を行うアメリカのハイ・テック・ハイや、デンマークのエグモント・ホイスコーレン、MIT メディアラボなどの海外教育研修や視察の日本導入にも携わられている方である。藤原氏から「学習の個性化」や「探究」に関する示唆に富んだ話を拝聴できたことは、本校共同研究における取り組みを省察する貴重な機会となった。

下記は合同研修会後の本校教職員の振り返りの一部である。

- ・「探究」とは何かを問い続けることの大切さを実感した。それが自分の実践を構想したり振り返りするための重要なものさしになるのだと思う。
- ・探究する学びにふさわしい問いや課題の立て方について具体的に学ぶことができた。概念化・一般化・抽象化に繋がる問い（課題）の設定について、今後も追究していきたい。
- ・私たち自身が探究する姿勢を常に持ち続けることが大切だと感じた。その姿勢がきっと生徒の学びをよりよいものにすることに繋がると思う。興味・関心のアンテナを今まで以上に高くしていきたい。

（３） 生徒へのアンケートの実施

生徒の変容から本学校園で育てたい３つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況を把握するために、研究１年次に引き続き、本年度も全校生徒へアンケート調査を実施した。なお質問項目に関しては、図２を参照されたい。

昨年度のアンケート調査の結果については、前述したように「自己調整力」に関する３つの項目に関して他の項目と比較すると肯定的回答が少なかった。その３項目について、昨年度と本年度の回答結果を表２に示す。

表 2

質問項目	年度	よくしている	時々している	あまりしていない	していない
私は課題を解決する際に、課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。	R5	35. 5%	46. 7%	15. 7%	2. 1%
	R6	44. 9%	38. 9%	13. 4%	2. 9%
私は課題を解決する際に、課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。	R5	42. 1%	44. 8%	11%	2. 1%
	R6	47. 3%	39. 4%	11. 7%	1. 7%
私は課題を解決する際に、課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。	R5	48. 3%	41. 2%	8. 8%	1. 7%
	R6	52. 7%	36%	9. 5%	1. 7%

昨年度からの変容として、3項目とも「よくしている」の回答の割合が増加している。つまり、「自己調整力」を習慣的・自覚的に働かせている生徒が増えていると考えられる。

さらに各教科の授業において「学習の個性化」の充実が図られているか見取るための質問項目について、各項目の本年度の肯定的回答の割合を表3に示す。

表3

質問項目	肯定的回答
各教科の授業には、これまでの学習で身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決する授業がある。	97.3%
各教科の授業には、自分の興味・関心に応じて、自ら学習課題を設定する授業がある。	95.2%
各教科の授業には、自ら情報を収集、整理・分析し、まとめ・表現する授業がある。	97.6%
各教科の授業には、課題解決の方法や学習の進め方などについて、自ら調整する授業がある。	95.5%
各教科の授業には、自らの学習の達成度やそこに向けた学習の進め方などについて振り返り、その後の学習に生かす授業がある。	95.8%
各教科の授業には、自ら評価基準（A・B・Cの基準）を設定し、学習に臨む授業がある。	90.3%

どの項目に関しても、肯定的回答が90%を超えている。この結果から各教科で「学習の個性化」の充実を図った授業を実践しており、それを多くの生徒が実感していることが分かった。

これらの結果から、本研究を推進する中で「学習の個性化」の充実を意識した授業改善が各教科において図られており、それらの授業や取り組みが「自己調整力」を習慣的・自覚的に働かせる生徒の育成に繋がっているのではないかと考えている。本研究を推進していく中で今後も継続的にアンケート調査を行い、さらなる検証を進めていきたい。

（4）校内授業研究会

教科をこえた教職員グループを形成し、各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」を踏まえて授業づくりや授業観察を行い、「『学習の個性化』を促す手だて」について教科横断的に検討・検証する場として、今年度も校内授業研究会を実施した。本年度は1月に数学科と家庭科、2月に道德科と美術科が授業提案を行った。各教科の授業実践の概要については、本校のホームページを参照いただきたい。

ここでは家庭科が提案した授業を踏まえ、「生徒に課題解決時の理想像を設定させる」という「『学習の個性化』を促す手だて」の有効性について考察したいと考える。

本実践では「中学生に必要な栄養と、健康によい食習慣」という題材において、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」を「現在の自分の食生活を見直し、自分に合う食生活に整えていくための知識や技能を身につけ、実現可能な方法で実践しようとする姿」と想定し、「なりたい自分の理想像に近づくためのお弁当を考える」という学習課題を設定した。そして「学習に力を入れたい」、「運動を頑張りたい」、「バランスのよい食事で健康的に過ごしたい」といった自分のなりたい理想像を生徒それぞれに設定させた上で、生徒にそれまでに培った知識・技能を活用させながらそれぞれの日頃の昼食（本校では給食ではなく生徒はお弁当を持参している。）を分析させ、生徒それぞれの理想像に合ったお弁当にするための改善策を生徒に考えさせた。

この明確にした「理想像」は、生徒が自らの学びを点検・調整していく上での指針となり、生徒は「理想像」と実態を照らし合わせ、自らの点検・調整の度合いを吟味することができると考えられる。これは前述した「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素の1つである「目標（ゴール）の設定」とも関連しており、生徒がそれまでに培った資質・能力を活用しながら自らの学びを点検・調整する際の一助となると考える。

(5) 「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」の更新

これまでの研修や授業実践を踏まえて、各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を更新した。今年度更新した一覧を、次頁に表4として掲載する。今後も引き続き授業実践及び検証を重ね、精査していきたい。

VI 研究の成果と課題（本年度）

成果

- ・群馬大学附属中学校との合同研修会や校内研修を通して、「学習の個性化」について見識を深めることができた。
- ・校内研修にて「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素を分類・整理し、授業改善の観点を明確にすることができた。
- ・本研究を推進する中で、「学習の個性化」の充実を意識した授業改善が各教科で図られており、それを多くの生徒が実感していることがアンケート調査から確認できた。
- ・本研究を推進する中で、課題解決をする際に「見通す」、「点検・調整する」、「振り返り、次に生かす」といった自己調整をよくする生徒が増加していることがアンケート調査から確認できた。
- ・これまでの研修や授業実践を踏まえて、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を各教科で更新することができた。
- ・校内授業研究会で提案した各授業の実践概要、指導案、資料を本校ホームページに掲載し、本研究の成果として発信することができた。

課題

- ・本研究を省察し、「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素について精査すること。
- ・育てたい3つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について、生徒の変容を継続的に見取り、検証を進めること。（アンケート調査の継続）
- ・授業実践を重ねることで「『学習の個性化』を促す手だて」の有効性の検証を進め、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を精査すること。

表 4

	「学習の個性化」を充実することで期待する生徒の姿	「学習の個性化」を促す手立て
国語	これまでの学習で身につけた力や知識・技能を関連付けて課題を解決する姿	・課題を解決するための力や知識・技能の蓄積 ・課題を設定するための視点の蓄積 ・題材及び課題設定の工夫 ・課題解決時における自らの理想像を明確にする場面の設定
	批判的思考を働かせ、自ら課題を設定する姿	
	必要な情報を自ら収集、整理・分析し、まとめ・表現する姿	・学習履歴の蓄積と活用 ・1枚ポートフォリオ（振り返り）の活用 ・自らの学びを省察できる場面の設定
	見通しをもって学習に取り組み、課題解決の方法や学習の進め方などを自ら調整する姿	
	学習の達成度や進め方、身につけた力や知識・技能などについて振り返り、その後の学習に生かす姿	
社会	学習課題に対して、適切な情報を収集し、必要な情報を選択・判断して活用する姿	・適切に情報を収集し、選択・判断できる技能の習得 ・社会的な見方・考え方を働かせながら既習の知識を活用し、追究できるような学習課題の設定
	これまでに学んだことを基に、新たな疑問や問いを立てることで解決を目指そうとする姿	・学習の見通しをもたせるとともに、学びの過程を振り返り、学習内容を調整できるような単元の学習シートの活用
	社会的事象を基に、課題を見出し、社会的な見方・考え方を働かせながら学習計画を立案し、修正をしながら解決を目指す姿	
数学	数学を日常場面へ活用しようとする姿	・振り返りやレポート ・探究の方向性の助言 ・ふさわしい課題の提示
	定理について探究しようとする姿	
	様々な考えを互いに尊重しあう姿	
理科	身近な自然現象に対して、疑問を持ち、仮説を設定して、既存の知識を活用して解決策を考え、課題を解決していく姿	・課題選択学習や、課題設定学習における観察や実験の材料を多様に準備し、その中から生徒に選択、または生徒自身に決定させる ・発展学習として単元の終わりなどに、既習事項をベースとして発展的課題を生徒に設定させる。学習空間を教室外や、学習時間を授業時間外など生徒の活動の場を広げていく
	自らの力で仮説を設定できる姿	
	課題解決の方法を自ら立案できる姿	
音楽	音楽的な見方・考え方が身に付き、自分に合った見方・考え方を活用する姿	・課題設定やゴールの例を教師が提示し、道筋を明確にする ・課題を見つけるための方法や視点を提示し、選択させながら学習を進める
	生徒の興味関心の幅が広がり、多様な音楽への興味が深まる姿	
美術	造形的な見方・考え方を働かせながら、これまでに学んだことを活かして楽しみながら創造活動に取り組む姿	・実生活において必要性を感じられる題材設定 ・情報量の多い資料（実物や高解像度資料） ・経験化したこれまでの学びが活用できる課題設定 ・自由度のある主題設定 ・学びの道筋が見える1枚ポートフォリオの活用 ・情報の収集や吟味（ICT活用） ・容易に修正できるアイディアスケッチ（ICT活用） ・自発的な課題設定を促す発問の工夫 ・「試み」が行える環境設定 ・活動時間の確保
	造形的な視点をもち、対象や事象に対して自分としての意味や価値を作り出したり、交流の中で新しい価値観を見出したりしながら、主体的に創造活動に取り組む姿	
技術・家庭	授業で身につけた知識と技能を、生活の中で活用しようとする姿	・授業で学習したことを家庭で生かせる課題の提示 ・自分や家族の生活と結びつけて考えられる場や課題の設定
	自分や家庭生活を振り返って課題を見出し、適する方法で解決しようとしている姿	・身の回りの問題を発見し、解決していけるような題材の設定
	学びを通して、自分の思いを具体的に構想し、よりよい生活にしていこうとする姿	・家庭での実践を評価、改善していけるような課題の設定
	実践したことを振り返り、評価し、よりよい生活になるよう改善しようとする姿	
保体	生徒が知識・技能の習得に必要感をもって課題解決に向かう姿	・実技においては、ゲームなどの実践から基本動作を確認する流れを意識した授業の展開 ・技能を提示してから、自分なりの解釈をする時間を設ける ・学習内容と自分を比較する場の設定や発問の工夫 ・新しい視点を見つけ、物事を多面的に捉えられる題材設定の工夫 ・知識・技能の活用を意識した時間の設定
	個に応じた知識・技能を身に付け、授業中に発揮する姿	
	知識・技能を高めるために、自ら適切な課題設定をする姿	
	授業で学んだ知識・技能を、自分の身体や生活に当てはめて考えを深める姿	
英語	これまでの学習で身につけた知識・技能を活かして意欲的にコミュニケーション活動に取り組む姿	・身につけた知識・技能を活かせるようなタスクの設定 ・発展的な教材の開発 ・生徒へのフィードバックの充実 ・ICTの効果的な活用 ・ふり振り返りの充実
	自己の関心や必要に応じて情報を探究しようとする姿	
	自己の興味、関心に従ってテーマを設定し、パフォーマンス活動に意欲的に取り組もうとする姿	
	自己の活動をふり振り返り、分析し、次の活動に向けて改善しようとする姿	
道徳	これまでの自分の生き方や各教科等における学習の成果を基に、よりよい生き方について広い視野から多面的・多角的に考えている姿	・道徳的価値を多面的・多角的に捉え直す教材、学習課題の設定 ・自己の生き方や価値観に基づき、教材に描かれている道徳的価値を見出す活動（道徳読み）の導入 ・協働的な学習の機会と振り返りの位置付け
	子ども一人一人の価値観や各教科での学習を基に、教材に描かれた事象について、望ましい価値を導き出そうとする姿	
	他者との協働を通じて、道徳的諸問題に対して、自分事としてとらえたこと（納得解）をこれからの生き方に生かしていこうとする姿	

【主な引用・参考文献】

- ・宇都宮大学共同教育学部附属学校園：『連携研究プロジェクト研究概要集』，2024。
- ・宇都宮大学共同教育学部附属中学校：『宇大附属研究論集 第72集』，2024。
- ・中央教育審議会：『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申），2021。